

受賞。ほかに『さびしがりやのクニット』(二六〇)など絵本が三作と大人向きエッセイが多数あり、『彫刻家の娘』(六八)、『少女ソフィアの夏』(七二)は代表作。

(坂井玲子)

## ユ

湯浅芳子

ゆあき よしこ

一八九六(明29) 露文学者。

本名ヨシ。京都に生まれる。日本女子大学校、早稲田大学露文科で学ぶ。一九二七〜三〇年の間、宮本百合子とともにモスクワ留学。帰国後ロシア文学の研究、紹介に携わる。主な訳書にチエーホフの『桜の園』、『かもめ』、『三人姉妹』、『ゴリキーの幼年時代』、『マルシャークの森は生きている』(一九五三)、『魔法の品売ります』(二六六)などがある。

(北畑静子)

ユイニング ジュリアーナ Juliana Ewing 一八四

一〜八五 イギリスの童話作家。幼くして話上手で「ジュディおばさん」と愛称された。母ギャティ夫人が「ジュディおばさんの雑誌」(二八六六〜八五)を出し、

ユイニングはそれで多数の作品を発表。『ティモシーのくつ』を含む『The Brownies and Other Tales』からジュニア・ガール・スカウトの愛称ブラウニーズが出た。現実物語も妖精物語も書き、生前は人気拔群だった。

(吉田新一)

結城ふじを

ゆじおき

一九二五(大14) 童謡詩人。本名芙二男。山形県に生まれる。山形工業学校卒。

歌人の父や童謡詩人の兄結城よしをの影響を受け、音楽への興味も手伝い、童謡の詩作をはじめ。兄の戦病死によって休刊した、山形県の童謡誌「おてだま」を四八年に復刊、主宰する。息の長い地方誌として評価され、日本詩人連盟・日本作詩家協会の同人賞、また六〇年度の日本童謡協会賞を受ける。詩謡集に『青春手巾』(一九五二)がある他、童謡に『豆っこ打ち』、『つんとつうたら』(共に中田喜直作曲)、『ゆかいなまちのふうせんや』(富田勲作曲)などがある。

(羽曾部 忠)

結城よしを

ゆじおき

一九二〇〜四四(大9) 昭19) 童謡詩人。本名芳夫。山形県の生まれ。一九三四年市立

第四高等小学校を卒業後、山形市の八文字屋書店の住み込み店員をしながら、童謡をつくった。三八年童謡誌「おてだま」を創刊。のち、陸軍船舶一等兵として出征、四四年小倉陸軍病院にて戦病死。代表作に『ナイシヨ話』、『峠の仔馬』など、遺稿集に『月と兵隊と童

謡』(二九六八)。山形市霞城公園に「ないしよ話碑」がある。  
(尾上尚子)

**優良図書一覧** よいちらん 東京高師・文理科大学卒業生の団体若溪会研究部(主事田中寛二)が、一九一三年(大2)七月教育振興事業の一つとして読み物調査会を創設し、少年読み物の選定推薦を行い、一八年より一般図書および教育書をも加えて小冊子とした。希望者多く一三年九月〜二八年二月までの分を第一輯として刊行した。発行所昭和出版社、発行元松邑三松堂、二八年一二月発行、総ページ四三五。第二輯以降は松邑三松堂発行となる。第二輯(三三・二二)、文部省児童図書推薦がはじまる時期に第三輯(三九・二〇)を出して終刊。調査員は、田口福司郎・小野(畠山)源蔵・木下一雄・長谷川敏正・野村基・堀七蔵ら三〇名(書記石黒修)で解題の執筆者でもあった。本書は、当時図書館、学校、出版社、研究者を中心に普及し版を重ね、戦前期唯一の優良解題書として権威ある存在を誇った。読書指導の資料として活用され影響力をもった。(滑川道夫)

**ユーカラ** アイヌの神話。文字をもたないアイヌ民族の文学はすべて口伝えの文学、つまり口承文学である。その文学は大きく分けると、歌うように語る歌謡文学と、普通のことばで語る説話文学の二つになる。ユーカラはその歌謡文学の一つである。ただ、ユーカラには広義の意味で使われる場合と、狭義の意味で使

われる場合とがある。広義で使う場合のユーカラには、次の四つが含まれる。その一つは、雷の神とか狐の神といった自然神のことが語られるカムイ・ユーカラである。二つめは、自然神とは別の人間くさい神アイヌラックルを主人公にしたものであり、これはオイナと呼ばれることがある。三つめは狭い意味のユーカラで、半神半人の少年英雄ポイヤウンベを主人公にした物語である。四つめはメノコ・ユーカラと呼ばれるものが、世界五大叙事詩の一つに数えられるこの神話を、最初に我が国に紹介したのは金田一京助である。

(安藤美紀夫)

**雪女** ゆきお 大雪の夜に現れる妖怪。雪女郎・雪女御・雪婆さとも呼ばれている。雪の降る夜に出会うとだまされ、雪に埋もれて凍死させられる。また、子どもをさらう、あるいは雪女が子どもを連れて歩き、行き会う人に抱いてくれと頼むので、うっかり引き受けるとだんだん重くなって、ついには崩れおちて死んでしまう。柳田国男の『遠野物語』(二九一〇)によると、小正月の夜、あるいは冬の満月の夜は、雪女が子どもをあまた引き連れて遊ぶので、子どもたちに夜まで外で遊んではいけないと戒める習慣もあったという。その雪女の姿は、鳥山石燕の描く「百鬼夜行」を見ると下長髪白衣で足のない姿であり、色白の美女と伝えられている。小泉八雲によって小説化されており、八雲

の雪女は大変な美女で、また男が大変若く美男であったので、生涯しゃべらぬことを条件にして助ける。そして男はお雪という女と結ばれるが、この女がいつまでも年を取らず美しい。ある夜男は妻に雪女と出会ったことを話すと、実は妻は雪女であり、子がいることで男を殺さず去る。いまでは八雲の雪女の方がよく知られている。  
(福原登美子)

ユゴー ヴィクトール Victor Hugo 一八〇二—一八

五 一九世紀フランス最大の詩人、小説家、劇作家、そして政治家。東部フランス、ブザンソンで、ナポレオン軍の將軍を父として生まれた。少年時代から詩人を志して詩作し、一七歳でアカデミー・フランセーズの詩のコンクールで一等賞を得、青年時代から壮年時代にかけては、詩集『オードとバラード』(一八二六)、劇作『クロムウェル』(二七)などの作品でロマン派のリーダーとなった。七月革命の衝撃で社会主義的人道主義、自由主義へと転進し、詩作も詩集『秋の木の葉』(三二)、『内心の声』(三七)、『光と影』(四〇)などで内面化していった。こうしたユゴーの人道主義的傾向は、この時代の代表作『ノートル・ダム・ド・パリ』(三二)にすでに萌芽がみられ、これはのちの大作『レ・ミゼラブル』(六二)において大きく花開いた。一方、ナポレオン三世のクーデターで、政治家として国外追放の憂き目を見たが、一九年間にわたる亡命生活の間に、『諸世紀

の伝説』(五九—八三)、『九十三年』(七四)、『レ・ミゼラブル』などの大作を次々に生み出し、とくに『レ・ミゼラブル』は、たちまち世界中で大評判となり、このジャン・ヴァルジャンの愛と苦悩の物語は、児童向けに書き替えられて、世界の名作として親しまれてきた。我が国でも、黒岩涙香の自由訳『噫無情』(一九〇二)以来、無数の再話\*が児童たちに読まれてきた。  
(榊原晃三)

柚木象吉 しげよし

一八二〇—(大九—) 児童文学作家。本名石川茂。山梨県増穂村に生まれる。高等

小学校卒業後、中国大陸や東京、福知山などを転々、さまざまな職業につく。日本犬・五郎とそれをめぐる人びとの体験を通して、太平洋戦争を描き出した『ああ! 五郎』(二九六八)で日本児童文学者協会新人賞を受賞。ほかに、明治維新を被差別部落の少年の立場で書いた『あすはいづくるか』(七一)などがある。近代日本の曲がり角を、子どもの視点から描こうとしている。  
(宮川健郎)

ユノセイイチ 一九二二—(大一一—) 画家(油絵)

による抽象画)、絵本作家、童話の挿絵も描く。本名油野誠一。大分県に生まれる。『くまざぶろう』『12345あひるのさんぽ』(ともに一九六七)は日本の創作絵本草分け期の作。フリーハンドのソフトな線と黄やオレンジを主とした暖色を多用、ユニークな発想による

絵本を描く。『あいうえお』(六八)、『おんどりのねがい』(七二)、『大きなニレの木』(七三)など。フロッタージユ(こすり出し)の手法も絵柄の特徴となっている。

(森久保仙太郎)

ユーモア humo(r) 語源はラテン語の(h)umor(液体、湿気の意)。おかしさの一形態で、風刺のように憤怒に基づく攻撃的なものでなく、許容と共感に基づき、他者を傷つけることのない調和的な複合感情で、ゆとりある態度より生まれ、他者の心を解放する。文学上では、作家たちが人生や人間を、愛と許容をもつて肯定的にみつめ、結果的に作品に豊かな「微笑」を漂わせる。ただユーモアそのものが文学の目的とならず、誘引のファクターとしての役割を果たすことが多い。なお、イギリスはこのたぐいの文学の宝庫である。

(原 昌)

### ユーモア文学

ユーモア

ユーモアを基調とした文学のこと

をいうが、へおかしさの文学の総称として用いることもある。風刺、皮肉、機知、ペーソス、ナンセンスなどと隣り合わせて潜むことも多い。イギリスではサッカーに風刺、ファッションにペーソスを嗅ぐが、おおむね調和的な情緒に根づいたユーモアの作品が主流を成し、そのほとんどが空想系の文学に属している。グレイアム『たのしい川べ』(一九〇八)、ヒューマンな温かさのあるロフティン『ドリトル先生アフリカゆ

き』(二〇)、ミルン『クマのプーさん』(二六)、ノートン『魔法のベッド南の島へ』(四三)、ボンド『くまのバディントン』(五八)など。一方、フランスでは、コミック・スピリットに基づき、理論的で明晰な論理をもつた作品が多く、モーロア『デアの国ノッポの国』(三〇)、ウイルドラック『ライオンのめがね』(三三)、エーメ『おにごっこ物語』(三四)、ドリリュオン『みどりのゆび』(五七)などがある。またアメリカでは、多様性に富み、風刺の潜むマーク・トウエイン『トム・ソーヤーの冒険』(二七六)をはじめ、シニカルなサーバー『たくさんのお月さま』(一九四三)、文明批判を秘めたマックロスキー『ゆかいなホームーくん』(同)とO・バターワース『おきなたまご』(五六)、陽気で健康的なアトウォーター『ポッパーさんのペンギン』(三八)、その他B・マクドナルド『ピククルウイグルおばさん』(四七)、クリアリー『がんばれヘンリーくん』(五〇)、R・ローソン『海賊キッドのあざらし』(五六)などがあり、デューボア『二十一の気球』(四七)、スロボトキン『りんごの木の下宇宙船』(五二)などのSF系にも豊かな笑いがある。アメリカでは、おおむねリアリズム系の作品に混在しているのが特徴的である。その他の国々では、ドイツのプロイスラー『大どろぼうホッツェンプロッツ』(六二)、フィンランドのヤンソン『たのしいムーミン一家』(四九)、スウェーデンのリンドグレン『長く

つ下のピッピ』(四五)、ノルウェーのエグネール『ゆかいなどろぼうたち』(五五)、中国の張天翼『大林と小林』(三三)などが代表例である。日本では、伝承や庶民文芸に豊かに宿っていた笑いを継承しえず、近代文学の成長過程で軽視された。むしろ傍流にいた作家たちに笑いがあり、宮沢賢治『どんぐりと山猫』(二二)、『注文の多い料理店』(同)、千葉省三『鷹の巣とり』(二八)、\*『仁兵衛学校』(二九)、豊島与志雄『天狗笑』(二六)、村山篤子『ライオンの大損』(二九)、新美南吉『和太郎さんと牛』(四三)、『花のき村と盗人たち』(同)など。しかしいずれも短編で、長編のユーモア小説は、佐々木邦『苦心の学友』(三〇)、サトウハチロー『おさらび横町』(三五)のような大衆性の濃い小説群に多い。戦後になって、青木茂『三太武勇伝』(四八)、筒井敬介『コルプス先生汽車へのる』(四七)などが現れる。近年この類の文学がしきりに模索されているが、その筆頭にいるのは、『ちようちよむすび』(六五)を書いた今江祥智である。

湯山

昭 あきらま

一九三二

(昭七)

作曲家。

神奈川県平塚市に生まれ、一九五五年東京芸術大学卒業。在学中に音楽コンクール作曲部門に二回入賞。六三年合唱曲第一作『小さな目』が成功を収めて、合唱音楽を多数作曲するようになり、全日本合唱連盟副理事長。『おはながわらった』『おはなしゆびさん』『あめ

ふりくまのこ』など、音楽的でしやれた伴奏つきの童謡を多数作曲している。七三、七六年日本童謡賞を受賞。『童謡の日』の提唱者。(小山章三)

由利聖子

せりこ

一九二一

四三(明四四)

昭一八

少女小説作家。本名鈴木富美子。父は通信省の技師。一九三三年ごろから『少女の友』主筆内山基に認められて同誌に短編を発表。その中の『チビ君』が好評だったので三五、三六年、チビ君を主人公にした連作を讀切連載。これが後年『チビ君物語』正・続(三九、四一)として出版される。以後引き続き毎年河目梯二の挿絵で『仔猫ルイの報告書』『奮物語』などの長編を四二年まで連載。ほかに増刊や他誌にも主として松本かつちの挿絵で短編などを発表。どれも日常生活を明るく機知と批判精神の中に人間的な温かい目で捉えたものだが、短編がユーモア調の強いのに対し、長編は微笑の中に感傷の涙を誘う特異な作風で、この点サトウハチローとも佐々木邦とも一線を画すること代表作『チビ君物語』は母の旧奉公先に居候兼お手伝いとして寄宿した少女を中心に人々の心理が、当時の東京山の手の風俗を背景に鮮やかに描かれ、可憐な主人公とともに、男女交際嚴禁の時代の少女たちにさわやかな異性像を示した副主人公修三様は印象的である。しかし出版界の戦時体制強化につれ、作品からユーモア色は後退し、成長小説的傾向を増した。病弱だったので各地

に転地療養したが、四二年病状悪化、「少女の友」連載中の『五月物語』を七月号で中断、翌年死去。作品は生存中から各社で、戦後も何度も出版された。

(遠藤寛子)

ユルギエレヴィチ イレナ Irena Jurjlewicz 一

九〇三、ポーランドの女流作家。第二次大戦中ナチス占領下での非合法教育に携わった。最初年少向けの創作から出発し『しあわせのちようちよう』(一九六〇)グラビヤンスキ絵)など有名だが、のちに『すべてが別のように』(六八)など思春期の少女少女の問題に正面から取り組んだ作品を次々と著した。『Ten obcy』よそからきた子』(六二)は六四年度国際アンデルセン賞のオナーリストに入った。

(内田莉沙子)

袁 鷹 ユワン 一九二四、中国の作家、詩人。本

名は田復春、のち田鍾洛と改名。江蘇省の没落地主の家に生まれる。その後、一家は杭州から上海に移居。上海で大学を卒業、中学校の教員となる。一九四五年、中国共産党に入党、「新生代」などの編集に従事する。のち上海で「世界晨报」「新民報」「解放日報」の記者、編集者として活躍するかわら、青年の生活を描いた詩や小説、散文を発表した。五二年末、北京「人民日報」社へ移り今日に至っている。五四年、中国作家協会に加入、七九年に開かれた第四次中華全国文学芸術工作者代表大会において、中国作家協会理事、

創作委員会委員に選出される。現在「人民日報」文芸部主任、「人民文学」「児童文学」編集委員。四〇年に及ぶ文学生活の中で、『かがり火の燃える時』(一九五五)、『五封信』(六二)など、清新活発な趣のある数多くの優れた詩作品を生み出し、多くの読者を魅了した。

(君島久子)

尹石重 ユンソクチュン ユンソク 一九一一、韓国の童

謡詩人。「子ども」「新少年」(以上一九二三)に童謡が入選して以来本格的な創作活動を開始。一九三二年にははやくも『尹石重童謡集』を刊行した。翌年、開闢社に入社し方定煥の残した「子ども」誌を主宰。三九年に上智大学新聞学科を卒業し、帰国後は雑誌社や新聞社に勤務のかわら童心主義的な童謡の創作一筋に歩み、八〇〇〇編の作品を世に送った。五六年には「若芽の会」を結成し児童文化運動に寄与している。

(仲村修)